会員通信・News & Comments

魚類学雑誌
50(1): 80

学会誌のカラー印刷代の著者負担について

日本魚類学会では，これまで，学会誌である魚類学雑誌と***Ichthyological Research***のカラー印刷代については，費用の半額を学会が補ってきました．しかし，近年の厳しい学会運営費を考慮して，昨年の評議員会と総会において，カラー印刷代の著者による全額負担を提案し，承認されました．その結果，2003年1月1日以降に投稿された論文については，カラー印刷の費用の全額を著者負担とさせていただきます．なお，***Ichthyological Research***については，雑誌に掲載された白黒の写真などのカラー版を，シュプリンガー社のオンラインジャーナルであるLINKに掲載することができますので，投稿時に編集委員長にお問い合わせください．

（編集委員会）

高木和徳博士 (1925–)

魚類学雑誌
50(1): 80–87

インタビュー

先 達 に 聞 く

はじめに

第2回目の「先達に聞く」は，高木和徳先生への訪問インタビューです．高木先生は1925年（大正14年）6月26日に東京都文京区でお生まれになりました．ハゼ亜目魚類の分類に関する論文を数多く発表されています．先生はハゼ類の頭部感覚系が系統分類の研究において極めて重要な意味をもつことを明らかにしました．今回は松浦啓一・林 公義の両名が，都内大崎のレストランで約2時間にわたる貴重なお話を伺い，その概要を会話形式でまとめました．収録日は2002年8月27日（火）です．文頭のTは高木先生，Mは松浦，Hは林です．先生が事前に用意された履歴メモを参考にして話が弾みました．

M：今日はよろしくお願いいたします．

H：失礼をして，記録用のテープを使用しますが，よろしいでしょうか．

T：結構ですよ．オフレコ以外はね（笑）．

M：詳しい履歴書をご用意下さったのですが，ご兄弟について少し伺いたいと思います．ご兄弟はいらっしゃるんですか？

T：そう，兄弟は3人で，僕は末っ子です．兄二人は両方とも親にならって内科の医者になったんです．親父は兄弟3人とも医者にさせたかったようですが，戦争末期のことで医学部関係は専門学校でさえ徴兵免除になるものだから，入学倍率は何十倍ということで，とても僕らには歯が立たなかったから，受けた学校はどこも不合格．親父は大学勤めから間もなく開業医になったんですけど，患者さんから電話でもあればすぐ飛び出すような仕事を見ていました．僕は幼い時から足が不自由で，これでは急患に応えることは出来ないなって思い込んでいたから，初めから気が進まなかった．その頃見つけたのが受験雑誌「蛍雪時代」に載った寺尾　新先生の学校紹介記事でした．それと水産講習所が「博物」で受験できたのも大きな魅力でした．だからその点では自分の思い通りということでしょうか．親父にとっては不安だったようですが．

M：では水産講習所に入る前から生物が目的というか，魚に興味を持っておられたんですか？

T：いや魚には全然興味なかったんです．中学で「博物」を教わったのが面白い先生でしてね，東大理学部を出たリベラリストだったんですが，その先生の講義が面

白くてね．これも大きな動機になったと思いますね．それと寺尾先生の記事のことでは，後で気がついたことですが，親父の書斎に先生の著書で「生物統計学」や随筆集の「鱗片集」までありました．寺尾先生はスタンフォード大学でパール先生から生物統計学を学んでいます．当時では先端的な方の本を町医者の親父が読んでいたとは意外でした．意外といえば，自分がその先生の教室に身を置くことになろうとはね．

M：水産講習所に入られて，初めから分類学に特に興味があったのですか？

T：無かったですね．分類学というか，動物学に興味をもつようになったのは，実は空襲のおかげなんです．一年生の学年末試験が始まって直ぐの大空襲で3ヶ月間休校になりました．確か6月1日から再開するのですが，一ヶ月ほどして，とりあえず何か勉強をしたいと考え，頭に強く残っていた久保伊津男先生の部屋を訪ねたのです．罹災前の一年間「動物学実験」を担当しておられて親しみもありました．それが最初のご縁で，同じ部屋で隣同士だった松原喜代松先生とはほとんど同時にお付き合いするようになりました．魚類の分類との係わりは卒論でのハゼの査定からです．

M：その教室で卒論を書かれたんですね？

T：そうです．メモにあるように，それまでに三つの仕事を手伝いました．そのなかでヌカエビの論文は単著の形になっていますが，特に印象深い論文の一つです．

ちょうどあの頃は，それこそ話が飛びますが，「紙」なんていう物資は北海道にしかなかったんです．久保先生の学位論文は戦後間もなく講習所の研究報告として出版されましたが，その実現に先生一人で苦労されたのは一つの戦後の学界秘話といえるでしょう．自分でそれこそ払い下げの軍靴をすり減らすまでに方々歩いて必要な印刷紙を横浜辺りで探し出したんです．印刷所も自分で秀英舎（今の大日本印刷）の疎開先を見つけました．戦前から理科系の出版では一流の印刷会社をね，まだ会社が復興して間もない頃だったでしょう．戦後としては，今からすれば裏ページが透けるような紙だけれども，名実ともに一流の研究報告に仕上がったんです．私の場合は，札幌の内田亨先生から先生が創刊する雑誌への投稿募集が久保先生のところにあって，あんな悲惨な時期に早々と公表できました．

H：ハゼとの出会いになった卒業論文は，1953年の第7論文となる鱗に関する論文とは，また別の論文でしょうか？

T：同じといえましょうね．提出した卒業論文は和文です．それに提出したものは手書きでした．英訳して公表したのはそれから数年後ということです．

M：研究対象にハゼを選ばれた理由はなんでしょうか？

T：久保先生も松原先生もそうですが寺尾先生から「比較形態学」を教え込まれたわけでしてね．僕の場合も比較研究が主題でした．昭和23年頃といえば，石山禮蔵先生も研究材料の採集旅行では苦労されたようですが，久保先生のアイデアで「材料がハゼなら郵便で送って貰える」ということでハゼに決まりました（笑）．先輩達が全国の水産試験場などにいましたから，必要なところに手紙でお願いしさえすれば，標本は何でも足代をかけずにすぐに23種類が集まりました．もちろんホルマリン標本ですが，塩漬けもあったかな．別に新鮮な材料でなくても良かったんです．鱗の研究ですから標本に鱗がついてさえいれば．ご存知のように鱗は年齢査定に適していますから，その基礎研究という意味もあったんです．

M：この高木先生のメモに「講習所研究報告の対外評価」というのがありますが，これはどういうことでしょうか？

T：それは寺尾先生の見聞ですが，欧米の有数の研究所では水産講習所のJournal of the Imperial Fisheries Institutetは直ぐ目につく場所に置いてあるということでした．あの黄表紙の研究報告は大した評価を受けたんですね．

「学会誌」と大学の「紀要」には優劣を分ける違いがあると言われています．学会誌にはピイア・レヴュー（査読）があるからというのがその理由なんです．その査読については，学界でもいろいろ問題にされているように，その査読を分担する先生はどうかということなのです．論文作成の訓練を受けてなくても査読者になれるという一部の風潮が問題ですね．多くの大学はそれぞれに「紀要」をもっています．優劣を取り上げるくらいなら，「紀要」の編集レベルを上げて，それを「学会誌」に反映させるべきでしょう．初めから「紀要はダメ」と権威ある方が決め付けるのはどう考えてもおかしなことです．もっと真面目に考えるべき問題が，いわば政治的に解決されているような気がします．そういう意味で自分達の紀要はもっと大事にして欲しいと今でも考えています．

そこで自分なりに挑戦したことがあります．若い頃，編集委員長に「それなら自分の思ったように投稿規程でも書いてごらん」と励まされて，新しい執筆要領が学内で発表されるまでになりました．しかし，それは大方の理解を得られず，すぐに旧態に戻ってしまいました．やはり「紀要はダメだ」と言う空気も強かったし，そういうことに関心を向けてくれる先生が当時の教授の中で少なかったということでしょう．

H：ところで当時の論文作成指導についてお聞きしたいのですが，今でも4年次の卒論学生に対して論文作成のノウ・ハウを指導できる時間が十分にとれていないと思います．実際にいろいろな雑誌に投稿するとなると，論文を先輩や教授に見てもらうことになると思いますが，当時はそういう論文作成のための方法論について教授が厳しく指導して下さったのでしょうか？

T：実際はないといっていいでしょうね．教授はいつも忙しすぎるんです．つい最近ある先生の書かれた本を

読んで思ったのですが，僕らの習った先生方は旧制高校を出た先生で，専門科目も外国語で勉強した人が多いといいます．だから外国語については厳しく鍛えられているし，論文は別に外国語だけの問題ではないと思いますが，そういう事情を考えると，論文作成について日常的に厳しく躾けられていたのではないでしょうか．

その点，寺尾先生は理学部の考え方を水産学界に導入して先鞭をつけられたと思います．久保先生や松原先生から聞いた話では，学会誌や学内誌に投稿された原稿が気に入らないと「こんなもん読めるか！」と原稿を床に投げ捨ててしまった．でもそんな姿勢が若い人の反感を買ったようです．それに耐え切れたのが松原先生と久保先生．寺尾先生がまだ若かったせいもあるのでしょうが．

僕の初めての論文下書きに目を通して久保先生が最初に言われたのが「君，論理どこで習ってきたんだ！」水産講習所に論理学の授業があるわけではないし，もちろん中学でもないのを先刻ご承知の上でのこと．ショック療法だったんですね．

H：特に分類に関する論文の書き方は他の論文と少し違うところがありますね．例えば命名法にしてもいろいろと国際的なルールがありますし，そういう論文作成のトレーニングというのはどこでされたのでしょうか？

T：僕の場合は特に細かい指導を受けた覚えはないですね．実地にネムリシビレエイの論文を書いたり，岩波「生物学講座」などで勉強してきましたが，特に講義を受けるということはありませんでした．

M：今，新種記載の論文について話されましたが，初めての新種記載をフランス語で書かれていますが？

T：それはこういうことです．僕が助手になった頃，二ヶ国語習得が学位審査の要件になるということが新聞の一面記事になりました．新制の学位制度の生まれる頃は，かつて旧制の高等学校で教育を受けた人達が学界をリードしていたわけです．旧制の時代は第二外国語という意識があまりなく，英語・ドイツ語・フランス語などが一体として考えられていたようです．当時新制の学位制度を作ろうとされていた人達は，そういうことが頭にあって，複数の外国語を一体として考えることに別段抵抗もなかったのでしょう．正式にはそのような条件は実現しなかったのですが．

M：それは大学で2ヶ国語という意味ですか？

T：大学教育での2ヶ国語履修については変わっていないでしょう．僕の場合フランス語を選ぶについては，農商務省の給費留学生として渡仏を経験された水産講習所の大先輩が，君がフランス語をやるなら，といろいろ面倒をみて下さったのが大きな励みになりました．フランス魚類学に惹かれるようになった頃，練習船神鷹丸の船長から「東シナ海でこんな珍しい魚が採れた」と教室にあの魚の標本が届いたんです．新種だと分かって論文にして出す時にはフランス語で書くこと以外頭になかったな，と思います．なんといっても大先輩の強力な後ろ盾がありましたから．でもフランス語の科学論文はあれが最初で最後です．

M：話が前後するかも知れませんが，卒業の1ヶ月前に就職の指示があったということですが，これは久保先生からでしょうか？

T：そうです．あなた方には考えられないかも知れませんが，戦前から科長さんの権力は強いもので，卒業生の就職先は殆ど一人で割り振っていたんです．ですから学生自身で就職運動なんて考えられないわけで，科長さんの言うなりになっていたと思います．僕の場合は久保先生が「学校に採用するからね」と言われ「よろしくお願いします」ということで，ただそれだけで決まりでしたね（笑）．

今になって状況を整理してみると，とにかく僕らより少し年齢の上の人がいないわけですよ．みんな戦争に行ってしまって，どの教室にも若手がいない．養殖科では久保先生が1番若かった．でも戦後の無力感が尾を引いていて，僕のあとの数年間は助手を採用して後継ぎを養成しようという気力は他の先生方にはなかったと思います．

M：高木先生と久保先生の年の差はおいくつだったんでしょう？

T：16歳ですか．だから普通だったら一人ぐらい間に人がいても良かったんです．でもそれも良し悪しだったかもしれなくて．人がいなかったから直接久保先生の指導を受けられたという，僕としては幸いの部分もあったし，バッファー（中間職）がいなかったという苦しい所もあった．それも事の成り行きでしたから．でも「空白の時代だったなぁ！」というのが今の実感ですね．

M：メモに論文作成修業のことで，ブックデザイン・コンテスト発表展示会とありますが？

T：論文の作成修業ということでは随分先生に叩き込まれましたが，その頃の話です．僕は工業デザイン辺りに興味があって，そんな催しに足が向くんです．今でも銀座の「松屋」はいろいろな面でデザインを大切にする店ですよね．僕が学生指導のために訳した「M.I.T. (Massachusetts Institute of Technology)」のプリントの原本は，実はブックデザイン・コンテストに入選しているんです．入選作品がたまたま立ち寄った松屋のデザイン・コーナーにあったんです．小さな本ですが，よく見るとM.I.T.の修士論文の手引きでした．直ぐに執筆された先生に手紙を出すと，先生から原本が送られてきました．内容を見ると久保先生から指導を受けていたことがそっくりそのまま出ていたのでとても感激しました．とにかくタイプライター印字のものをオフセット刷りにした，それも30頁ばかりの本ですけれど．そういうものでコンテストに入選するような，デザインにまでも力を入れる姿勢がM.I.T.にはあるんですよね．それに比べると日本の論文作成指導への関心は無いに等しいなと思えます．

M：その後に「揶揄されたタイプライター独習」というのがありますが，これはどなたかが皮肉られたということなんですか？

T：僕らが教えられてきたのは，研究とは印刷公表されて初めて仕上がりだということです．欧文での公表に備えてタイプライターの打ち方を独習していたんですね，久里浜時代（水産大学）のことです．そんな時助手仲間が「よくタイプライターの練習なんかできるね？　僕なんか実験が忙しくてそんな時間はないよ」と言うもので（笑），こちらがびっくりしました．論文を公表するのにタイプライターも打てなくてどうするのかなと．これも同じ頃の経験ですが，久保先生が学内の編集委員で，僕は編集幹事を仰せつかっていました．教室に集まってくる論文原稿を整理して印刷所へ送り出すのが仕事です．欧文ならば当然タイプライターで打ってあるのですが，どうしたらこういう打ち方ができるのか，という原稿がきましてね．とにかく字が横に並んでいればいいだろう，といった感じの原稿なんです．こんな原稿を印刷所に送った時のことを考えると……．印刷所は岡田　要先生から推薦された，いわば一流の印刷所なんです．こんな原稿を送ったら印刷所に恥ずかしいと思い，著者に原稿の体裁を整えて貰おうと戻したんですが，そうすると著者から，教室の教授がこのままで良いから再投稿をするようにと言われたそうです．そういう教育を受ける人は気の毒です．教授自身がしっかりした論文作成教育を受けていないから起った事件でしょう．仕方がない，たまたまその原稿が短編，10枚前後だったので，自分で打ち直して入稿しました．今ではこんなことはないでしょうね．教授が権威をかさにきる点は今でも残っているかも知れませんが（笑）．僕にとって忘れようにも忘れられない教訓でした．

M：次に内田恵太郎先生との関係についてですが，これは先生がハゼを始められてからのことでしょうか？

T：そうです，論文を何篇か出してからで，先生のハゼ類標本から7種類記載しました．これは久保先生の力を評価され，この人の弟子なら大丈夫だろうと思って任されたのではないかと僕は今でも思っています．

M：そうすると内田先生とのご関係は久保先生を通じてということですか？

T：そうです．それまでは面識がありませんでしたから，魚類学修業ではこういうこともありました．阿部宗明先生とのご縁の始まりについてのことです．さっきネムリシビレエイの話がでましたが，あれは幸いにも今でも有効種ですが，新種記載の続報を出したときのことです．投稿したところ編集委員会から原稿を取下げて欲しいと投稿辞退を勧める葉書が来ました．これは恐らく阿部先生はご存知ないことで，編集委員会が考えた事だと思っていますが，学校を出たばかりの若輩が大先輩の判断を否定できるのか，と疑われたのでしょうね．先生が「図説有用魚類千種」で誤査定と判断されたことについてそんな指摘をうけたわけです．久保先生に相談すると「自分で正しいと思ったら出しなさい」と勇気づけられました．それでもう一度原稿を見直し，再投稿しました．さすがに動物学会ですね，その後は何も言わずに受入れてくれました．僕としては，阿部先生自身がこのことについてどうお考えだったかずっと気になっていました．亡くなってから先生の旧蔵本を見せて頂いたら，その種の記載の部分を先生は赤で訂正しておられました．先生は納得して下さっていたのだと安心しました．あの一件があったことで阿部先生は僕を一応学者として認めて下さったのだと思っています．こういう挫折がないと人生というのは先に進めないんですね．

M：陛下との御縁ということがその後に書いてありますが？

T：これも教室への信用があってのことだと思います．後から考えると，僕はハゼの研究を始めたばかりでしたし，殿下（当時）にご進講なさるに相応しい方はほかにもあったはずです．

M：防空壕跡での集中講義というのは？

T：それは赤坂御所で以前の防空壕が研究室になっていて，それが印象的でした．あなた方は行かれたことがありますか？

H：まだ敷地内に建物だけは残っておりますね．

T：とにかく僕としてはその日その日がそれなりの緊張の連続でした．

M：記念となった「原色魚類図鑑」とありますけれども？

T：その年の10月から12月までのご進講のお陰で，宮内庁から小切手を頂いたんです．それまで買えなかった北隆館の図鑑がやっと手に入りました．あの本の裏表紙には小切手のコピーが貼ってあります（笑）．

M：貴重なものですね．当時は冨山一郎先生のご進講もあったんでしょうか？

T：そうです．思い出すのは殿下の「ハゼ科魚類の肩甲骨」の論文の時のことです．僕がまだ若くて，さっき話したように論文作成技法に夢中な頃でしたから，添削について随分と言いたいことを言ったので冨山先生はさぞ困られたことでしょうね．当日の校閲作業は確か午後3時頃から終電近い時間までかかりました．四谷駅の階段を降りたら赤電車（終電），もしあれに遅れていたら，僕らお金もなくて家までタクシーに乗れたかどうか（笑）．陛下にとっても，多分初めてのご経験だったでしょうから，この点でも印象深い一篇だと思いますが，僕にとっても印象深い．とにかく冨山先生が良く付き合って下さったな，と恥ずかしい思いです．

H：また前に戻りますが，内田恵太郎先生が「稚魚と亀とハゼの分類学」というエッセイを書かれていますが，その頃も内田先生は，ハゼそのものの研究をしておられなかったと思いますが？

T：実際は道津喜衛先生でしたね．いろいろな実務の

手配はすべて道津先生でした．

H：なるほど．内田先生のお弟子さんだったのですからね．

T：そうです．

H：どういう流れだったのかという疑問がありまして．実は私が高木先生の論文を知り始めた時に，先生の論文を見るために東大の総合資料館（当時）に行き，冨山先生の論文コレクションを拝見すると，高木先生の論文がほとんど揃っていたものですから，私は冨山先生にお願いしてコピーをさせて頂きました．それで，高木先生の論文のコピーは全てTOMIYAMA I. の所蔵スタンプのついたものなんです（笑）．冨山先生が殿下のハゼの研究論文の教授をされていたとお聞きしていましたが，陛下の第1論文「ハゼ科魚類の肩甲骨について」は高木先生も冨山先生とご一緒に査読されたのですか？

T：どういう理由で僕が呼ばれたのか知りませんが，最後の，投稿される直前のことだったと思います．

H：あの肩甲骨の論文は「魚類学雑誌」に投稿された論文ですね？　そうすると原稿の査読というのも「魚類学雑誌」投稿用というような準備で進められていたのでしょうか？

T：そうだと思いますね．

H：その頃はもう高木先生は魚類学会への投稿原稿の校閲もされていたのですか？

T：まだその頃は編集委員ではなかったと思います．編集委員をやってはいますが．

H：冨山先生は昭和天皇にもすでにご進講をされていましたね？

T：生物学御研究所長までなさいましたからね．

H：聞いた話の中では末広恭雄先生も殿下に魚類学のご進講をされていたとか？

T：そうだと思います．というのは，僕らから見ると錚錚たる先生方が23日のお祝い（今では天皇誕生日）に見えていました．末広先生にもあそこで何度かお目にかかりましたから．

H：いくつか高木先生のハゼ類の論文を読みますと，例えば鱗であるとか，今ではもうそれを必ず観察しなければならないような感覚管や孔器列などの研究成果が多く報告されていますが，ハゼ類の研究でその辺に注目された動機は何かあったのでしょうか？　外国のハゼの論文などがきっかけになったのでしょうか？

T：鱗については先ほど説明したとおりです．感覚系に注目できたのは，フランス語との結びつきがあってのことだと思っています．フランス語の文献を辿って必要な文献を取り寄せているうちに興味が湧いたんです．ですから最初はサンツォ(L. Sanzo)ではなく，イリン(B. S. Iljin)とかボルケア(I. Borcea)とかラテン系のハゼの論文を集めました．フランス語をやっていなければ感覚系あたりの研究方向にはならなかったのですから，偶然とはいえ有難かったと思っています．

H：そうすると，その後ですか？　ミラー(P. J. Miller)とか，いわば英語圏でハゼの感覚系の論文が出てきたのは？

T：そうですね，ローフェン(R. R. Rofen-Harry, 1948)を例外として．そういえば，僕が教授になって間もない頃ヨーロッパ研修旅行の帰りにブリストルに立ち寄ったのがミラーさんに会った最初でした．論文にも書いておきましたが，アングロサクソン系の学者はラテン系が進めていた感覚系の研究を問題にしていなかった．あんな「不安定な分類形質」という位でね．松原先生までの時代の「分類」は何といってもハードな形質（骨格形質）の時代でしたよね．だから今ごろの動きを見たら松原先生なんかなんといわれるか．そんな時代ですから当然と言えるでしょうが，アメリカの研究者などはずいぶんひどい評価を与えていました．

ところで僕にとっては有難いことでしたが，ヨーロッパにいるハゼの系統は単純なんです．ところが日本のハゼはいろいろな点で種分化が進んでいるでしょう．それにつれて感覚系の分化も豊かなんです．僕の研究はそこにうまく当たったといえそうです．そんなことで感覚管系までサンツォさんは研究したくてもやれなかった．先生もそんなことを書き残しています．

H：そうですね．ハゼ科は属の数でも日本は最高位に近いですから．ヨーロッパでは種類も非常に少ないということもあるんでしょうね．

M：京都大学に内地留学をされたのはいつ頃ですか？

T：昭和37年です．その年の冬が豪雪年でね，僕が舞鶴にいた翌年の2月頃まで大雪に悩まされました．積雪用の長靴での通学の毎日など都会育ちの僕には思い出が深いんです．

M：半年位だったんでしょうか？

T：10ヶ月です．それまでは学校（東京水産大学）の中に閉じこもっていましたから，色々な先生や仲間に会えたのは大きな収穫でした．

M：その頃いらっしゃった先生達というのは，松原先生の他にはどんな方達ですか？

T：そう，落合（明）さん，岩井（保）さんは当然のこととして，あとは赤崎（正人）さん，浅野（博利）さん，荒賀（忠一）さん，岡村（収）さん，尼岡（邦夫）さん，中村（泉）さんもそうですね．

M：松原先生についてはいろんな方が厳しい方とおっしゃっていますが？　尼岡先生は大学院の時代に原図を持って松原先生のところに行くと「標本を持って来い」と言われ，ディバイダーをあてられて，「違っている」とビリビリに原図を目の前で破られたとか．

T：多分それは寺尾先生の真似なんですよ（笑）．

M：高木先生はそういう点は如何でしたか？

T：松原先生は，僕が行った時にはかなり体を悪くしておられたから，そういう元気はなかったですね．それと，いくら昔は教えたといってもやっぱり外の者には遠

慮されたのかもしれません．でも第一の原因は体を悪くされてもうエネルギーが無かったんだと思います．あれから何年もしないうちに亡くなられましたから．

M：当時松原先生の指導を受けられての印象というのは？

T：松原先生が水産講習所におられた時から口癖のように，「魚の分類をする者は魚の味を知らなきゃいかん」とおっしゃっていました．

H：その「魚の味を知らなければ」という事で思い出しましたが，阿部先生が東海区水産研究所におられた頃に同じ経験をしています．先生のところに標本を届けたり，魚類学雑誌のバックナンバーを購入しに訪ねると，いつも部屋から生臭い匂いがするんです．見るとアルマイトの弁当箱に築地魚市場で朝買った，多分「新顔の魚」だと思いますが，熱湯だけを魚にかけて先生は試食しておられ，部屋中に生臭い匂いが立ち込めていましたね．なぜそうされるのかを尋ねましたら，全く同じ事を言われました．魚の分類には魚の味が大切だということでした．

T：恐らくその話は一つの根から出たものではなくて，同じ体験から出たことだと思いますね．お二人ともそれだけ苦労された訳で．阿部先生が毎朝欠かさず魚市場に通われたというのは，誰でもが真似の出来ることではないですからね．

H：私の記憶では，日本魚類学会が正式に発足したのは，当時の日本大学農獣医学部の世田谷校舎で水産学会が開催された時だと思います．「魚の会」の錚錚たる先生方が集まられ，設立総会が開かれていた記憶があります．多分その後で高木先生方が学会の運営に携わってきたと思いますが，その頃は大変なご苦労があったのでは？

T：苦労といっても，それは人によって評価が分かれるのでしょうが，僕らの印象では石山先生が動かなければ，学会はなかったとは思いますね．

H：魚類学会の大会やシンポジウムを開催するようになってからは，中央（東京水産大学）に地方から出てくるのは大変だったと思いますが？　やはり水産学会に所属していながら，ついでに魚類学会へというようなパターンが多かったように思えますが，どうでしょう．

T：そうですね，昔はどの学会も発展段階ではそうなのかも知れませんが，分類関係も水産学会で発表というのが珍しくなかったと思います．それが分化して，落ち着く所に落ち着いたというのが今の姿ではないでしょうか．

M：資料には，次の項目に教授資格審査請求論文というのがありますが？

T：これは僕の意固地な所と思われるかも知れませんね．一つは自分の人事のことで長引いていたこともありましてね．一つは教授職ならば学位の場合と同じように資格審査請求論文があっていいんじゃないかと考えたんです．それならばどういう形で自分の考えを伝えればよいか．その結論として，教育と担当する水産資源学とについての考えを事前に公表したかった．教育の方はよかったのですが，担当科目の方は編集委員会に拒否されてしまいました．僕の原稿は雑誌の内容としてそぐわないということでした．その理由は，校閲意見書によると，先輩達の考え方を疑った部分を問題にしたようです．論文を書けばそれまでの意見に対して反駁するような意見が出てきて不思議じゃない．それに反発した委員にとっては，自分の権威を傷つけられたように思えたのでしょうか．僕の考えが伝わらないまま審査が済んだのは未だに残念な思いです．

M：メモではその後最近のサンツォ教授事蹟調べのことになりますが，その辺はもう魚類学会の年会で紹介されていますね．

H：先生が水産大学にお勤めになられてから，色々な論文がおありですね．イセエビについての資源学的な論文も多いですし，それはやはり先生が所属していた教室との関係が？

T：そうですね，僕が勤めて直ぐに久保先生が資源学の教室を起されましたから．しかしまだ魚の分類についての研究は引きずっていくのですが．研究分野を変えるといっても，僕が資源学で何ができるかということで，最初に手がけたのがイセエビの生態学でした．その頃から魚類学から遠のく時期がしばらく続きます．

H：そういう中でも次々とハゼの研究は進んでくるのですが．あのハゼの感覚系を観察するためにいろいろと前処理をする方法がありますが，これは先生独自で考案したテクニックなのでしょうか？

T：それは論文の脚注で説明したようにイリンの論文が基です．イリンの論文もあの頃はロシア語ではなく，フランス語圏の文献だったんですね．そういえばルーマニアのボルケアの論文もフランス語でした．

H：先生の論文にある描画の事ですが，特に孔器を描いた図というのは，見るとすぐに高木先生の図とわかるようなものが多いと思いますが．あれを真似て書こうとしてもちょっと難しいですね．あの描画の練習はどこかでされたのでしょうか？

T：いや，僕は普通の標本画が描けないんでね．結局，分類そのものの勉強をしなかったということもあるでしょう．あれが描けたのは動物教室にツアイス製の1倍という対物レンズがあったからです．それと当時普通の直立単眼顕微鏡ではなく，水平支軸の端に今では当たり前の双眼レンズ部分の付いたもので，接眼レンズは確か5倍を使いました．

H：特に今のように使い勝手の良い顕微鏡が出ていれば別ですけれど，当時としてはあそこまで細かく見て描かれるのは大変でしたね．

T：ただあの観察もスケッチだけして，論文にしてないものがあって，今いえば言い訳になりますが，あれは

もう少し続けていれば良かったんでしょうね．教室の仕事が変わったことも大きく響いたんですが．

M：ところで「オウディクス」という事務所名の選定はどのようにされたんでしょうか？

T：ネーミングが尋ねられるとは意外ですね．事務所の名前には僕としては随分苦労しました．当時のフランスからの留学生が一緒になって考えてくれて，「オウディクス　トウキョウ」に落着きました．あの頃，今のオリックスのように，語尾をXで結ぶネーミングが流行ったんです．前半はフランス語のアクロニームですが，東京科学情報国際流通事務所を表しています．

M：こういう編集をするという仕事の選択というのは，やはりM.I.T.との出会いからなのでしょうか？

T：論文作成で若い頃から徹底的に叩き込まれたのが下地になったと思います．仕事の内容は研究論文とか会議用の口頭発表とかの原稿で，学位論文の一部も手がけています．

M：そういう報告書や研究論文を校閲されているわけですが，口頭発表原稿なども含めて，お客さんのことなんですが，一般的な印象としてどうでしょうか，だんだんと改善されてきているんですか？

T：そうともいえません．一つ不満なのは，ある意味ではしょうがないというか，日本ではサービスにお金を払う風習がありませんね．ですから，本当は先ず和文で指導を受けて欲しいのですが，注文がありません．それに英語にしても本文で基礎を身につけて欲しいのですが，それもない．原稿のごく一部だけが注文の大半です．著者抄録とか図表の英文説明ぐらい（笑）．そういうことでは効果がないんですが，それでもお客さんにリピーターが多いのが救いです．それは若い人が自分でも納得できる指導を受けたと考えてもらっているんだなと思えるからです．

M：それから投稿原稿を編集しようとする場合，このメモには「校閲意見に優先する著者の決定権と自己責任とへの自覚喚起」とありますが，これは高木先生が先ほどいくつかのリジェクトとか，取下げ勧告とかいうことに対して，色々考えて行動されてきたことと強く関連はあるのですか？

T：リジェクトされたからというよりも，僕のこれまでの履歴全体から出てきたものですね．それと一つはもう寺尾先生流のやり方は通用しないっていうこと（笑）．ただ投げ捨てるだけでは指導にならないということですかね．それでも著者の自覚がなければ，人任せというのはお金を出すだけで，本人にとって何の役にも立たない．それだけは自覚しなければいけないなと思いますね．

M：M.I.T.のプリントですが，あれは大学4年の時に頂いてる訳ですが，ただ4年の時にはあれを読んでも内容は吸収できていないですね．

T：ガイダンスがなければね．

M：そうですね，やはり大学院に行ってから，論文を書くようになってから，“そういえばそういうのを頂いたな”と思って読返したのを憶えています．その頃の自分で一番強く印象にあるのは，CBEのスタイルマニュアル(CBE Style Manual)で，最初の頃のエディションですね．あれを読んでから，それまで何もしていなかったというのが良く分かりました．

T：多分マニュアルというのはアメリカが得意なんですよ．そういう点でCBEのものは読み応えがあるというか，自分の疑問点にすぐに答えてくれますからね．

M：あとは，駒井　卓先生の「科学論文の書き方」．

T：あの本は僕らにとっては，本当に「バイブル」でしたね．

M：欧米ではああいうことを大学院で教えてくれるんですね．さらにレポート・ライティングというのは，アメリカでは小学校の頃からやっているらしいですね．日本では作文というと，心が感動したものを書きなさいということになりますが．

T：レポート・ライティングというのは普通の作文ではないんですよね．サイエンティフィック・レポート・ライティングというべきでしょうか．その違いが分からないと．

M：アメリカではレポート・ライティングに匹敵するようなものを，小さい時から教え込まれているみたいですね．例えば「紙」というテーマを与えると，最初に「紙」だから大きすぎるテーマな訳です．その中でテーマを絞り込まなければいけないという，最初に何をテーマとして抽出するかで，レポート・ライティングの質が違ってきますね．

T：そこからもうトレーニングになるわけですね．

M：高木先生は，魚という狭い分野に止まらないで校閲の仕事をされていますね．私自身はいろいろと編集に関することが気になります．私が魚類学会で編集を始めたときには富永義昭先生という信頼されている先生がいらっしゃったので，魚類学雑誌自体は偶然なんでしょうけど，あまり問題がなかったですね．

T：そうですね．

M：魚類学会の学会誌はだんだんと良い方向に移行しているんではないかと思っていますが，有名な学会でもレフェリー制度に疑問を持たざるを得ない場合もありますね．

T：前の話の繰り返しになりますが，建前だけで，「学会誌」だからということだけで評価をするのはおかしいでしょう．それよりもまず実質として自分の身内のスタッフをかためて，機関部内誌のレベルを上げさえすれば，自然と「学会誌」のレベルも上がるに決まっています．そこから学会の編集委員が選ばれていくわけですからね．でも，なかなかうまくいかないのでしょうね，現実は．

H：それでは長時間，ありがとうございました．

（松浦啓一　Keiichi Matsuura: 〒169–0073 東京都新宿区百人町3–23–1 国立科学博物館　e-mail: matsuura@kahaku.go.jp；林　公義　Masayoshi Hayashi: 〒238–0016 横須賀市深田台95　横須賀市自然・人文博物館　e-mail: masayosi-hayasi@city.yokosuka.kanagawa.jp）

魚類学雑誌
50(1): 87

研究室・研究所・博物館紹介

土佐清水市海洋生物研究施設「じんべえ館」の紹介

土佐清水市以布利といえば，ジンベエザメの大阪海遊館以布利センターがあることで有名ですが，その以布利センターの真向かいに，4月6日，土佐清水市海洋生物研究施設「じんべえ館」が完成しました．この施設の設置は，そこを若手を中心とした研究者に利用してもらい，土佐清水地区の活性化と「さかなのまち土佐清水」からの情報発信等を行うことを主要な目的とするものです．特に長期滞在者には宿泊利用料金が安く設定されており（表1），魚類や海洋生物の生態を研究する経済的に恵まれない大学院生などには格好の研究宿泊施設です．また，隣には大敷網等の漁獲物が水揚げされる以布利漁港が位置し，漁獲物を研究対象とする研究者にも好適です．どのような魚種が見られるかは，中坊徹次他編「以布利・黒潮の魚」を参照してください．

当施設は1·2階よりなり，1階（床面積111.3 m^2）にはホール，研修室，台所，シャワー，トイレのほか，小さな実験室と飼育室があります．観察機器としては実体顕微鏡，生物顕微鏡，顕微鏡用デジカメ，モニター，描画装置，照明装置，OHP等を備えています．2階（床面積115.9 m^2）は宿泊室5部屋（計16人収容），女子トイレ，洗面所，浴室になっています．

一地方自治体が全国の大学などの研究者のために公開された研究施設を創ることは，日本ではこれまでになかったことではないでしょうか．従って，「じんべえ館」の試みは，官と学の新たな関係の一つの実験と見なすことができます．この実験を成功させるためにも，魚類学会会員のみなさまには積極的なご支援とご協力をお願いする次第です．

利用を希望される方は，下記の窓口に必要書類を添えてお申し込み下さい（書類請求も同じ）．

〒787–0392 土佐清水市天神町11番2号　土佐清水市役所企画広報室じんべえ館係　電話：0880–82–1111（代表）

表1　「じんべえ館」の宿泊利用料金

一　般

使用日数	金　額
1日～6日以内	使用料1日1,000円
7日以上	基本料2,700円 使用料1日350円

会　員

使用日数	金　額
使用日数制限なし	会費（年間）30,000円

一般・会員

光熱水費	1日200円

（山岡耕作　Kosaku Yamaoka: 〒783–8502 南国市物部乙200　高知大学農学部，柳澤康信　Yasunobu Yanagisawa: 〒790–8577 松山市文京町2–5　愛媛大学理学部，幸田正典　Masanori Kohda: 〒558–8585 大阪市住吉区杉本3–3–138　大阪市立大学大学院理学研究科）

魚類学雑誌
50(1): 87–89

トピックス

沖縄島の純淡水魚事情

(1)　沖縄在来の純淡水魚

河川の流程が短く急峻であり，大陸や日本列島から分離してからの地史的時間が長い．そのため，立原・徳永（未発表）によると，琉球列島中部の沖縄島の144河川に出現した魚種は，周縁性魚類（173種）や回遊魚（22種）が多く，純淡水魚（23種）は日本列島と比べて非常に少ない（立原，2003）．純淡水魚のうち疑いなく在来種であると考えられるのは河川陸封型の生活史を送るアオバラヨシノボリとキバラヨシノボリの2種だけである．これに明治維新以前に記録の残るメダカ（方言でタカミーなど），ギンブナ（ターイュ），ドジョウ，タウナギ（トーンナージャー），タイワンキンギョ（トゥイュ），およびコイ（クーイュ）の6種の合計8種が在来の可能性のある純淡水魚である．

これら6種については，まだ在来種であるかどうかが

明らかにされていない．移入種の疑いの強いコイを除いた5種はその生態がいずれも劣悪な環境に適応しやすいものであることから，大陸から隔離される前から自然分布していたという見方もある．しかし，タウナギの方言トーンナージャーは唐鰻の意であろうし，タイワンキンギョの分布の多くは旧士族の開拓地と重なることや方言のトゥイユが唐魚（あるいは闘魚）の意であろうことを考えると，これら2種は王朝時代に持ち込まれた魚種である可能性が強い．6種の分布が自然あるいは人為的なものであるかを推測するには，遺伝的分析を推進する必要がある．

6種のうち唯一メダカが，アロザイムやミトコンドリアDNAの分析によって日本列島および琉球列島の集団の地理的変異について広く報告されている魚種である．アロザイム分析の結果，日本のメダカは遺伝的に大きく分化した北日本集団と南日本集団の2つの集団に二分された．このうち南日本集団は変異に富んでおり，1–2遺伝子座における地域特有の対立遺伝子の分布から9つの地域型に細分され（竹花・酒泉，2002），沖縄島や奄美大島のメダカは*AAT*遺伝子座における特異的な対立遺伝子の存在から琉球型と報告された (Sakaizumi *et al.*, 1983).

一方，ミトコンドリアDNAのシトクロムb遺伝子の分析では，九州西部から琉球列島までの3型がひとつにまとまったものとなっている（竹花・酒泉，2002）．太田 (2002) は，ミトコンドリアDNAの分析結果と比較し，琉球列島のメダカは人為的に少数個体が持ち込まれ，*AAT*遺伝子座の特異な遺伝子は創始者効果による遺伝子浮動が生じたことで説明できるのではないかと指摘しており，沖縄島のメダカは明治維新以前に水田伝搬などに伴って持ち込まれたものかも知れない．その固有性を把握するには，島内地域集団間のより詳細な分析が必要と思われる．

(2) 近年の国外移入魚

沖縄島の河川には細々と暮らす上記の8種や多くの回遊魚のほかに，様々な移入魚種が確認されている．2002年12月30日付日本経済新聞ほかによると，琉球大学立原助教授らが沖縄島の267河川で採集した純淡水魚24種のうち17種が明らかな移入種であることを確認した．なおこの17種には様々な地域で放流が行われているコイも含まれている．

この17種のうち14種が国外移入種で，1950年代に導入されたカワスズメや1960年代に確認されたグッピーなど定着後30年以上になる魚種もある．確認年代の古いものは，水産資源やそれに混入したもの，遊魚，防疫，観賞魚など様々である．しかし，近年確認された魚種は，マダラロリカリアやダニオ類など観賞魚由来のものが多い．ダニオ類はやんばる（沖縄島北部で生物多様性が高いことで知られる地域）のダム湖やその水域にあるため池でも確認され，北部ダム統合管理事務所による看板設置（図1）やため池からの駆除が行われた．沖縄では冬季の水温が本土と比べて温かく，熱帯，亜熱帯地域から輸入された観賞魚が定着しやすい条件が整っており，今後も海外から観賞用に持ち込まれた様々な魚種が放流あるいは投棄され，野外に定着する危険性がある．

図1. ため池に設置された看板

図2. 地域がコイを放流し，子ども会が連携してその保護を訴えている看板

国外移入種についてはマスコミや行政，学校教育を通じてある程度その問題性が取り上げられてきた．しかし，グッピーやその他熱帯魚が教室や池で飼育され，学校現場からも国外移入種が発生するケースも希ではなかったのではないかと思われる．

(3) 教育現場での移入種問題

目立つ国外移入種と同様，特異な生態系を有する沖縄島では国内移入種の問題性についても大きく取り上げていく必要がある．学校現場やそれを取り巻く市民の多くは国内移入種についての認識は極めて低いため注意が必要である．校区に豊かな自然がある学校にビオトープの池が建設されたり，セット販売された産地の分からないメダカと水草が教材として用いられることも希ではない．

平成14年度から総合的学習が全校で実施されること

になり，その時限数は小学校で105時間以上に達する．そこでは環境について浅はかに取り上げられる機会が増えており，さらなる移入種の発生が心配される．学校ビオトープについては，研究校に指定されたり熱心な先生がいる間はその管理が行き届いていたとしても，その期間にPTAや地域との連携がよほどしっかり結ばれていないと将来的には移入動物の巣窟，発生源となってしまうことが危惧される．

現在も地域と学校が連携してニシキゴイやメダカを放流し（図2），それらをマスコミが美談として取り上げることがある．とくに沖縄島産メダカについては，リュウキュウメダカと銘打たれ，あたかも新種か琉球列島産固有種であるかのように報道される．開発を免れた数少ない生息地では業者やマニアによる乱獲を招いており，メダカの分布が確認されていない沖縄島周辺離島や琉球列島南部を含む地域や学校で導入が試みられている．メダカをはじめ明治維新以前から分布する純淡水魚でこのような放流が行われてしまうと，その在来性や地域特異性の確認は困難なものとなってしまう．

(4) 放流行為の是非の普及啓発の推進を

日本各地でこれまで様々な魚類の放流が水産資源の維持や確保を目的として行われてきた．近年では他魚種の混入防止をはじめ，放流履歴の管理，地域集団の遺伝的多様性や特異性の損失を防止するべく放流魚の種苗性の確保，生態系への影響のモニタリングの実施などが検討され，それなりの指針が定められていることであろう．しかし，一般市民の多くや学校現場ではそのような努力は伝わっておらず，ニシキゴイや他地域産メダカの放流は善意で行われている．水産関係機関は水産業界における放流指針の例を学校現場でも分かるように教材化してほしいものである．さらに魚類関係研究者は少なくとも特異で脆弱な生態系を構成する島嶼域におけるむやみな淡水魚の放流による弊害について普及啓発活動を推進するとともに，移入魚種の放流規制の必要性について提言していく必要があるのではないだろうか．

引用文献

太田英利．2002．爬虫類・両生類・陸水魚類が語る琉球の古地理．遺伝，56(2): 35–41.

Sakaizumi, M., K. Moriwaki and N. Egami. 1983. Allozymic variation and regional differentiation in wild populations of th fish oryzias latipes. Copeia., 1983(2): 311–318.

立原一憲．2003．琉球列島の陸水環境と陸水生物．西田睦・鹿谷法一・諸喜田茂充（編），pp. 33–41，琉球列島の陸水生物．東海大学出版会，東京．

竹花佑介・酒泉　満．2002．メダカの遺伝的多様性の危機．遺伝，56(6): 66–71.

（澤志泰正　Yasumasa Sawashi: 〒905-1413 国頭村比地263-1　環境省やんばる野生生物保護センター　e-mail: sawashi@mtc.biglobe.ne.jp）

魚類学雑誌
50(1): 89–91

シマドジョウ属とその近縁な属に関する国際学会

II International conference
Loaches of the genus *Cobitis* and related genera
September 9–13, 2002 Olsztyn, Poland

ドジョウ科シマドジョウ属は，種内に自然三倍体や四倍体のグループを内在し，また，明らかに交雑により種形成が行われた異質四倍体の種が存在するなど，生物学上非常に興味深い分類群である．本分類群は種間で形態，斑紋が酷似し，分類が困難なグループであると共に，日本産の種に限って言えば，生物学的種概念に基づき認知されている種の多くが現在学名未決定であるという分類学上の大きな問題点を抱えている．こうした背景を擁するシマドジョウ属と，その近縁な属に関する国際学会が，9月9日から13日にかけてポーランドのオルシュチンで開催された．1999年にチェコのブルノで開催され，今回が2回目となる本学会には，欧州，アジアを中心として16カ国，約60名が参加した．日本からは，荒井克俊，鈴木淳志，斉藤憲治，北川忠生，中川雅博の各氏と筆者の6名，およびパートナー参加の3名が訪れた．ポーランドは日本からの直行便がないため，最短でもウィーンやルフトハンザ経由の2フライトが必要である（今回参加者の中には日本–韓国–フランクフルト–ウィーン–ワルシャワの4フライトを経た強者もいた）．会期中の当地はサマータイムで日本との時差は丁度7時間遅れ，気候は日本の10月下旬頃で，最高気温は20度を超えないとアナウンスされていたが，会期前半は日中

学会のポスター．会場正面に貼られていた

28度に達する暑さであった．

ポーランドには，ロシア，ドイツによる侵略と破壊，アウシュビッツなど戦争の悲劇を色濃く残すイメージがあり，首都ワルシャワの旧市街には現在も砲弾の痕跡が残る古い建造物が建ち並ぶが，これらは全て第二次大戦で壊滅状態となったあと，大戦前の風景写真や記憶を頼りに古い建築資材を用いてひび割れの一つまで再現したものであるという．ポーランドの人々の復興に懸ける意地とこだわりを見た思いであった．戦後の復興を遂げ民主化から十年以上を経た現在，インフラ整備が進んで治安も比較的良くなっているため，旅行者にとって格別不便はない（駅や売店の多くで英語が通じなかったのは難点だったが）．首都を離れれば日本人の姿は皆無であった反面，ポーランドの人々はおしなべて日本人観光客に親切とのことであり，実際それは折に触れ良く感じられた．オルシュチンはワルシャワよりバルト海方面へ向かって列車で約3時間の距離にある．一般のガイドブックに紹介されることは稀であるが，丘陵地帯に氷河期の遺存湖が点在する風光明媚な場所であった．会場となったWarmia and Mazury大学は市の中心部から車で約10分の距離にある．ここは1999年に新設された総合大学であり，オルシュチンは現在，大学を中心とした学園都市に変わる最中といった趣であった．

学会はオーガナイザーのBoroń, Szlachciak両女史により進行されたが，おっとりとしたBoroń女史と活発で話の途切れないSzlachciak女史の対照的な取り合わせは何とも妙味があった．発表は“Taxonomy, systematic status and zoogeography”, “Description, distribution, phylogeny and reproduction modes of diploid and polyploid hybrid forms”, “Biology and ecology”の三つのセッションに分けられていて，演題は口頭23題，ポスター25題（日本人研究者からは口頭5題，ポスター2題）であった．一人あたりの発表時間は口頭25分，ポスター5分であったが，タイムキーパーはなく，格別超過した場合に座長が指摘する程度であった．また，予定していたイランからの演題がキャンセルとなったこともあって，会の進行は緩やかであった．今回，英語のnative speakerがイギリス人唯一人であったため，使い慣れない英語を用いた参加者同士の交流はスムーズ(?)であったといえよう．内容はどうしても，我が国に分布しない欧州のシマドジョウ類に関する話題に集中するのだが，交雑による種形成や分布域内における核型変異など，日本の種が抱えている現象と共通したものが多く，大変興味を持って聴くことができた．開催国ポーランドでは，一つの流域内で2種のシマドジョウ属，その雑種二倍体，四種類の三倍体，二種類の四倍体が核型によって認識されるという．あらためて本属魚類の交配や種形成のメカニズムについて考え込まされた．日本と同様，欧州でもシマドジョウ類の種内変異や種の認識には手を焼いているらしく，形態・計数および計測形質，核型などに関する発表は多かった．その一方で，各国におけるシマドジョウ類とその分布，分類学的現状という紹介的な発表や，月一度の採集による集団の成長と年齢査定，水槽実験による微生息環境選択の日周変化などといった基礎的研究も多くあり，ドジョウ類の寄生虫という話題も気軽に持ち寄って発表されていた．日本や韓国の固有種に対する欧州研究者の関心も高く，それは後に記すワークショップでより明らかになる．

発表以外での筆者の関心事は，ルーマニアのNalbant氏との出会いであった．ドジョウ科魚類に興味を持つ方なら，彼の名前は世界的なドジョウ科魚類の分類学者として，また，丹羽　彌博士が新種記載したアジメドジョウの属名*Niwaella*の創設者としてよく知るところだろう．現在も精力的に研究を続けられており，ヨーロッパ・アジアにおける種の記載や分類体系の整理に深く関わっている．「シマドジョウもイシドジョウも新属と思う」と語る彼の，ご高齢ながら典型的なsplitterのスタンスには驚かされるばかりであったが，その口調にはいささかも気難しさは感じられなかった．彼は静かに佇んでいても独特の存在感を現し，仲間が親しく“Theo”と呼びかけると，答えて蕩々と途切れなく話し続けるのであった．ダイビングとカメラの話で盛り上がったあと，筆者が日本から持参したアユモドキの玩具を手渡すと，嬉しそうにこの属の分類学的講義をひとわたり聴かせてくれた．もちろん，日本のシマドジョウ類にもかねてより深い関心があるので，願わくは訪日したいが日本は遠いから……とも語っておられた．日本ではドジョウ科魚類の研究者は決して多くないが，いずれ彼や他の欧州・アジアの研究者を招いて日本でもシンポジウムが開催できたら，と夢想した一時であった．

エクスカーションについても触れておきたい．学会3日目は世界遺産に登録されているMalbork城の見学ツアーであった．13世紀，ドイツ騎士団Teutonic Knightsによって築城されたこの城も，前述したように大戦の影響を被り，その50%が破壊されてしまった．しかし，一見してわずか数十年前からの建物とは判らぬよう，古より

Malbork城見学風景

ワークショップの風景（中央はNalbant氏）

の趣を携えて復元されていた（聖堂など一部は現在も修復中）．迷路のような城の内部を2時間ほどかけて廻ると，昼食を挟んで途中水上輸送の運河を見学し，その後楽団によるポーランドの伝統民謡と踊りを楽しみながらの夕食となった．踊りが興に入ると参加者の多くが舞台に出て共に踊り始め，ディナーをより楽しいものとした．荒井・斉藤両氏の踊りも素敵であったし，鈴木氏はポーランド民謡Szla dzieweczka（邦題：森へ行きましょう）を現地語で唄い，皆の驚嘆の的となっていた．それにしても，こうした「発表以外のイベント」が多かったのも今学会の特色だろう．エクスカーションの他に，ディナーとパーティーはほぼ毎晩，市長挨拶があったり，パーティー会場への馬車での送迎など．こうしたイベントがなければ経費節約，参加費の低減になるだろうと思うが，「遊び」の多い学会も，それはそれで面白い．筆者にしてみれば，日本からわざわざ欧州まで出かけているのだから，会期中に飽きる間もないほどイベントを用意してくれるのは有り難くもあった．

学会4日目のワークショップ“Practical *Cobitis* species determination”は，本学会の大きな目玉となった．まず，トルコの研究者より形態分類が困難なシマドジョウ類の事例紹介があった後，Nalbant氏によるドジョウ科全般の分類学講義（分類のキー，属の特徴など）が小一時間あり，その後各地の研究者が持ち寄ったシマドジョウ属やその近縁属の標本を互いに観察し，活発な意見交換を行ったのである．文献では既知であっても，我々日本人が初めて目にする種の標本がそこには多数あり，写真を撮ったり，一つ借りては顕微鏡のもとに走ったり，といったことを繰り返した．もちろん，欧州の研究者にとっても日本産の種類は初見であり，その場での議論から互いの標本交換，文献や情報交換に発展し，今後のさらなる交流を確固たるものにしたと思われる．筆者は日本固有種イシドジョウの標本に対する，Nalbant氏の分類学的suggestionを楽しみにしていたので，chairpersonの立場を忘れたかのように標本に見入る氏の姿はよい土産となった．また，この日の午前中にはヨーロッパ産シマドジョウ類の交雑による種形成のメカニズムに関して，関係諸国の研究者同士が協力した取り組みが必要であるとの提言がなされた．日本からは荒井氏が「共通種を持たない日本と韓国の研究者はヨーロッパの成功を応援している」とエールを送ったのだが，その後のポスターセッションで韓国のKim氏がシマドジョウ属と*Iksookimia*属の雑種二倍体・三倍体個体群を紹介し，北川氏が異質四倍体ヤマトシマドジョウの分子系統を発表すると，ロシアのVasil'eva女史から「同じことはアジアでも起こっている．アジア・ヨーロッパを通じた世界的な協力が必要である」との意見が出され，居合わせた皆の賛同を受けた．この日の夜は学会最後のディナー．7時から始まったパーティーとギフト交換会は，踊りと歌を挟んで深夜まで続けられた．途中，荒井氏の掛け声により日本人皆が集まり，全員で「どじょっこふなっこ」を合唱したのだが，通して唄えるものが誰もいなくて皆適当に口ずさんでいたため，外国の方たちには何とも複雑なボーカル構成の唱歌に聞こえたことだろう．

5日間の会期を終え，次回開催国はクロアチアに決定した．今回発表されたタイトルの中から，チェコの学会誌Folia Biologicaからのproceedingとして30数題が選ばれ，それぞれのタイトルに対してreviewerも決定した．今後は各自が出版に向けて準備を進めることだろう．2002年度魚類学会年会を振り返ると，発表演題のうち，ドジョウ類に関するものは約4%．魚類全体での関心度からみれば高いとはいえないが，そんなドジョウのことだけで国際会議が成立するというのは何とも愉しい．参加者の誰かが言っていた．「たかがドジョウによくも世界各国からこんなに集まるものだ．これはいわばオタクの殿堂だ」．第一回のproceedingでは，参集メンバーを“cobitophiles”なる言葉で形容している．ドジョウをこよなく愛する人たち，と言うことだが，その言葉にすでに酔狂な響きがあろう．しかし，彼らの種形成や交雑の問題は，古くから我が国で議論されているフナ類を凌駕するのではないかと思えるし，魚類の進化を考えるよいモデルになることは間違いない．何より，ドジョウ類の交雑と種分化に関しては，我が国の皆森寿美夫博士がpioneerとして40年以上前に偉大な業績を挙げられており，日本はドジョウ科魚類研究の主要なパートを担えると言える．基礎的研究にもまだまだ手つかずの課題が多く残されている．これを機会に日本の魚類学者がもっと多くcobitophileとなって，三年後のクロアチアへは群をなして殿堂入りを果たすことを期待したい．

（清水孝昭　Takaaki Shimizu　〒799-3125 愛媛県伊予市森字末宗甲121-3　愛媛県中予水産試験場　e-mail: simizu-t@bea.hi-ho.ne.jp）